

韓国現代文学の現住所

—— 社会科学の視点から ——

瀧澤 秀樹

- I. 『아버지(父)』と『오렌지(オレンジ)』
—— 序にかえて ——
- II. 梁貴子の場合
- III. “韓国的なもの”の追求
- IV. 「韓国現代史」と「韓国現代文学」

キーワード：韓国文学・近代文学・現代文学・民衆文学・大衆文学

I. 『아버지(父)』と『오렌지(オレンジ)』 —— 序にかえて ——

昨年(1996年)8月に初刷が出て以来、今年の5～6月頃までベストセラーのトップを占め続け、1年足らずで100万部を超えるという、大衆小説の単著としてはおそらく空前のミリオン・セラーとなった⁽¹⁾キム・ジョンヒョン(김정현)著の『아버지(父)』⁽²⁾の出現は、1990年代後半の韓国社会の一断面を鮮やかに示す内容のものと見ることができる。100万部突破を記念して「父」に関する懸賞作文が募集され、直ちに映画化の計画が具体化された。一種

の「アボジ・シンドローム」と言えようか。

『아버지』は通俗の大衆小説としてのその性格から、本格的な「文学評論」の対象とはなりにくい作品であろうし、私のみるところ、その内容が現代韓国社会に固有のテーマを扱っているが故に爆発的人气をよんだというわけではない。むしろその反対に、そこで描かれている今日の韓国の“都市中産層”の生活像・家庭像は、(地名・職場・飲食サービス業の営業形式など)必要な変更を加えれば殆どそのまま今日の東京や大阪、あるいはおそらくニューヨークやロンドンの、“都市中産層”に移し替えることが出来るということで、新鮮なのである。アジア的“首座都市”のひとつソウルの個性喪失過程の表現と言ってもよいし、“中進資本主義”段階に到達した韓国社会の“脱周辺性”の表現とも言ってもよいだろう。

膵臓癌で自らの余命がいくばくもないと知った中年のエリート国家公務員(「文化財担当」という設定も面白い)の「死」と直面した葛藤、かなりゆったりとしたアパート(マンション)団地に住む家族(妻・ソウル大学に通う

(1)1980年代前半の話題作、金洪信『人間市場』が、当時「初のミリオン・セラー」と言われたが、『人間市場』は第Ⅰ部・第Ⅱ部で20冊にもなる連作で、ミリオン・セラーは多分7冊目あたりで実現していた。なお『人間市場』の内容の一部は、拙稿「韓国民衆の世界

とキリスト教」(『思想』1985年8月、拙著『韓国社会の転換』御茶の水書房、1988年、所収)で紹介したことがある。

(2)김정현『아버지』(문이당、1996年8月)。

娘・入試準備中の息子)との愛情の屈折と交歓、大学の同期の友人(医者・弁護士)との「三銃士」的な友情、「死」を目前にしてはじめて体験する不倫、その相手の女性の純粋さと妻との情の交流……。登場人物はこの他には、主人公と不倫相手の女性に暖かい屋台の主人、偶然出会ったカトリックの神父がその全てである。「癌告知」や“安楽死”の問題を正面に据えているだけに、また文体の読みやすさもあって、たしかに一種の迫力を持って読者に語りかけてくるところがあり、「ひとりの死による全ての和解」という結論に至る全編は、おそらく読者の大部分に“息をつく暇なく”一気に読ませたであろう魅力を持っている。

1996年の韓国の人口は4,525万人、家口(世帯)数は1,296万戸であるから、韓国の総世帯の約10%がこの書物を購入したことになる。都市と農村の葛藤や、都市生活者の階層間葛藤、生活苦や借金、政治の民主化や南北分断、植民地支配の遺産や対日感情、反共イデオロギー……。作家の思想的立場の相違を超えて、多くの大衆小説において少なくとも“背景説明”の役割を果たして来たこれらの問題が一切捨象ないし切り捨てられた『 아버지』の人気は、「文民政権」のもとでの韓国が“市民社会の成熟”ではなく“大衆社会化”への道をひた走っていることのあらわれと理解するのが、もっとも自然で素直な読み方であろうと思われる。

『 아버지』の持つ一種の「まじめさ」とは対照的な内容の様であり、また『 아버지』ほどひろく読まれた作品ではないが、やはり1996年のベストセラーの1冊であった大衆小説に、若い女流作家チョン・ジョンヒ(정정희)の『 오렌지

지(オレンジ)』⁽³⁾がある。アメリカ人の家庭に養子・養女として「入養」した子供たちが青年期を迎え、ニューヨークとソウルの梨泰院(ソウル市中央の南山公園の南にある、米軍将兵たちの出入りの多い遊興街)を舞台に、アルコール・麻薬・セックスにひたった頹廢的な生活を続ける様子が、とりたててストーリーらしきものがないまま、えんえんと描写される。アメリカの家庭への「入養」という、朝鮮戦争後の韓国の「社会問題」が背景にあり、最後の場面で済州島を訪れた二人の若者が済州産のオレンジを齧るところに何かしら「救済」の道をほのめかしてはいるものの、内容の大部分は目的意識のないだらけた生活の細部の描写である。食べ物と飲み物とその腐敗、そして「吐く」ことの執拗な描写の連続は、ほとんどそっくりそのまま『限りなく透明に近いブルー』や『ベッドタイムアイズ』を連想させるような内容である。

この作品は「第5回 作家世界文学賞」を受賞したというが、韓国の文学賞もいまやあまりに数が多くて、この賞の性格はよくわからない。しかし、『 오렌지』の好評に気を良くしてであろうか、作家チョン・ジョンヒが続けて発表した『 토마토(トマト)』⁽⁴⁾は、舞台をソウルと近郊の小都市に設定して、多少なりとストーリー性のあるものとなっているが、基調は『 오렌지』と同様のものである。こちらの方はそれほど評判にならなかったが、それでも初刷1カ月後に2刷が出た。

歴史意識を喪失しつつある韓国の都市青年・学生層が『 오렌지(オレンジ)』『 토마토(トマト)』の主な読者層であるとすれば、『 아버지(父)』と『 오렌지』は背中合わせの同一の実体

(3)정정희 『오렌지』(세계사, 1996年3月)。

(4)정정희 『토마토』(세계사, 1996年9月)。

に依拠して成立した大衆小説と見るべきであろう。大衆通俗小説の世界も、「純愛」「三角関係」「金儲け」「権力欲」「暴力」などを主題とした、1980年代的状況⁽⁵⁾から、より“成熟”した段階に入りつつあると見ればよいのだろうか。

Ⅱ. 梁貴子の場合

特徴的なことは、そして私のような韓国文学への接し方をして来た者にとって正直に言ってかなり残念なことは、1970年代の民主化運動のなかで模索されて来た韓国民族主義の一環としての「民族文学」⁽⁶⁾、あるいは1980年代中葉から活発化した基層民衆を主体とした民衆運動とのかかわりで語られて来た「民衆文学」⁽⁷⁾（ある人々によって時には「労働解放文学」とも呼ばれた）の潮流が、『아마지』の席卷する韓国の読書界で、次第にその立地を弱くして来ているように見えることである。

このかんの事情を典型的に示す例として、「民衆文学」作家から通俗大衆小説作家に変身した梁貴子の場合についてみておこう。

梁貴子は1955年に全羅北道の全州で生まれ、20歳代はじめの1978年に『文学思想』新人賞に「다시 시작하는 아침（あらためてはじめる朝）」と「이미 닫힌 門（すでに閉ざされた入

口）」が当選して文壇にデビューした若手の女流作家である。1985年には最初の創作小説集『귀머거리 새（耳の聴えない鳥）』を発表したが、民衆文学の作家としての梁貴子を一挙に有名にしたのは、1986年～1987年に『韓国文学』『文学思想』『東西文学』『世界の文学』『文芸中央』『매운 바람 부는 날（厳しい風の吹く日）』『우리 시대의 문학（我々の時代の文学）』などに連作で発表した『원미동（遠美洞）』シリーズを単行本にした『원미동 사람들（遠美洞の人々）』⁽⁸⁾であった。

遠美洞というのは、ソウルから仁川の方向に地下鉄（実は国鉄で地上を走るが、首都圏の人々は全て通称「地下鉄」と呼ぶ）1号線でソウル市域を出て最初の都市である富川市の、駅谷駅と富川駅と二等辺三角形をなす北側にある遠美山という丘陵地帯の北側斜面に、首都圏の膨張過程で形成された宏大な零細民の“無許可定着地”で、近年では都市近郊型の新興アパート団地に急速に変貌しつつある地域の地名である。1980年の富川市の人口50,706人、1995年の富川市の人口779,476人（うち遠美区384,451人）という数字⁽⁹⁾を見ただけでも、このかんの変化の激しさを充分に想像することができるであろう。

『원미동 사람들（遠美洞の人々）』は、「遠美洞

(5) その一部については、拙稿「삶의 구체성과 진실성」(『창작과 비평』1988년 겨울호、日本語訳「生の具体性と真実性——日本人—社会科学徒が見た現代韓国小説」拙著『韓国へのさまざまな旅』影書房、1992年、に所収)で紹介したことがある。

(6) 拙著『韓国民族主義論序説』(影書房、1984年)、白樂晴『民族文化運動の状況と論理』(滝沢監訳、御茶の水書房、1985年)などを参照。

(7) 1980年代前半にソウルの貧民街に住む人々の生活像をテーマにした作品を次々に発表した李東哲の小説を紹介した、拙稿「『韓国民衆の世界』について考える」(高井潔ほか『いまアジアを考えるⅥ』三省堂、1986

年、前掲拙著『韓国社会の転換』所収)を参照。但し李東哲の作品を「民衆文学」とすることには、白樂晴・黄皙暎両氏より直接批判されたことがある。その点をふまえ、前掲拙稿「生の具体性と真実性」では、当時の「民衆文学」のより正確な理解に努力してみた。

(8) 『원미동 사람들, 양귀자연작소설집』(문학과 지성사、1987年)。初版は1987年であるが、私の持っているのは1995年12月20日の27刷である。相当幅広い読者層に好感をもって迎えられたとみてよいであろう。

(9) 「人口・住宅センサス」の数字。ここでは『韓国統計年鑑』による。

23続」という街の一角に視点を定めて、そこで生活する様々な職業の人々が、その変化の渦中にふりまわされながら、賢くあるいは愚かに、正直にあるいは狡く、美しくあるいは汚く、生きる姿を、生活の実感を持って生き生きと描いた作品であった。ソウルの巨大な貧民街を舞台にした李東哲やある時期の黄哲暎の小説のように、スラム撤去に反対する住民の連帯意識を描こうという内容ではなく、生活する人々の息吹そのものを愛情を持って描くことで、社会変動のなかで主体的に生きる方向を見出せない人たちが、それでもやはり持っている人間性の賛歌として、私は読んだ。これを厳密に「民衆文学」と規定できるか否かは別にして、少なくとも「民衆を生き生きと描いた文学」であった。

梁貴子の“変身”は、1992年に李箱文学賞の第16回大賞を受賞した中編「숨은 꽃(かくれた花)」⁽¹⁰⁾から始まったように見える。「李箱文学賞」は今日の日本の芥川賞と直木賞を一本にしたほどの権威を一般に認められており、毎年の受賞作品集はその後数年間のロングセラーになるのが通例である。この賞の受賞を契機に現代文学の「大家」と認められた作家の例として、朴婉緒・崔仁浩・崔一男・李文烈・イムチョルウ(임철우)・趙星基らの名が挙げられると言えば、その「権威」の程度を理解することができるであろう(私自身の「李箱文学賞」の傾向への若干の違和感を以て、その「権威」を否定する考えはない)。梁貴子にとっても大きな名誉であり、さらに「大家」に成長する保証を得たと考えたとしても決して不思議ではない。

「숨은 꽃(かくれた花)」は74頁という分量で中編としてはかなり大部の作品であるが、とくにストーリーと見るべきものはなく、女性の

主人公である語り手が、ある寺院(帰神寺)で出会った大柄な体格の野性味のある男から受ける印象と対話を記録しながら、自分の作家生活の回想を基調として記した内容である(当然、語り手は作家梁貴子自身の分身と見られる)。そこには1980年の光州民衆抗争も登場し、現代の韓国社会を生きる作家と周辺人物の現実社会にかかわる苦悩や葛藤がそれなりに吐露される。その点で「숨은 꽃」はやはり『원미동 사람들』の作家の作品であることを実感させてはくれる。

しかし、この作品の与える圧倒的なイメージは、寺で会った未知の男性の持つ(発散する)野性的な魅力である。作家の社会意識は、そのイメージを浮き上がらせるための小道具として使われているという印象を受ける。ここにはもはや「民衆文学」の梁貴子の姿を見ることはできない。

梁貴子の“変身”をさらに決定的にしたのは、1995年に発表した長編の『천년의 사랑(千年の愛)』⁽¹¹⁾であった。不幸な結婚生活に苦しみ若い女性に対して、ひとりの青年が一方的に愛を告白し、あたかもその女性の人生に対する責任が自分にあるかのような献身的な行動を続ける。青年には、離れていても彼女の行動や心の変化を透視する超自然的な能力があり、愛されることのないままの一方的な献身の末に、遂に前夫の子供を妊娠している彼女と山小屋生活をするに至り、不幸だった彼女は新しい愛につつまれてその青年に抱かれて世を去る。生まれた前夫の娘と青年は、彼女を追憶しつつ、山での生活を続ける……。これだけの内容であれば「三流メロドラマ」でしかないが、『천년의 사랑』が話題作になったのは、これと前後して韓

(10)『92李箱文学賞受賞作品集16. 양귀자 숨은 꽃』(文学思想社、1992年)所収。

(11)양귀자『천년의 사랑』(상·하, 살림, 1995年)。

国大衆文学界で大流行した「前世」ブームの代表作となったからである。青年と女主人公は実は千年前の「前世」にチベットで既に出会っていた仲であり、その時成就しなかった愛が20世紀の韓国の地で実現したこと、そのことを過去の追想のなかから主人公が確認することが、この小説の特異な内容であり、物語性においてもクライマックスをなすことになる。

仏教（およびヒンズー教）の“輪廻転生”の考え方からすれば、生命を持つ全ての存在が前世を持ち、来世を持つのだろう。ブッダの根本思想が永劫の“輪廻転生”の循環からの脱出にあったとすれば、また本来“輪廻転生”が無限の連続と観念されていたとすれば、いずれの意味においても『천년의 사랑(千年の愛)』は仏教思想そのものとは異質の内容であろう。中国およびシベリア・モンゴルを含む北東アジアから韓半島にわたる地域の宗教意識と関連させて、韓国でブームとなった「前世」観念を考へてみることも意味があるかもしれない⁽¹²⁾。

しかしながら、“読み物”としては確かにそれなりに面白く、作家の“筆力”はここでも十分に発揮されているとはいえ、この小説を発表する際、作者は韓国民衆の宗教意識の奥深くまで掘り下げて、いわば“民衆の魂の根源”を探求したようには、思えない。それにしてもこの作品における「前世」の設定のされ方は、あまりに平板である。むしろ通俗の大衆小説の作家として“変身”し、韓国出版界の商業主義のなかで地位を占めようとするのが、「前世」を描

こうとするときの基本的動機であつたらう。「前世」小説ブームが一過性のものの如く去った後、女流ベストセラー作家としての梁貴子の地位は不動のものになっているのである。

Ⅲ. “韓国的なもの”の追求

梁貴子が「民衆文学」の立場を離れ、商業主義に便乗して流行作家になったからと言って、ここでその「道徳性」を問題にしようとするのではない。梁貴子の“変身”は、おそらく『아버지(父)』が空前のベストセラーとなるような、韓国社会の構造変化に関連して理解すべき事柄であろうからである。

しかし、「民衆文学」が弱体化したからと言って、「民衆文学」の担い手だった作家の多数が現実逃避的になったり社会意識を喪失しているわけではないし、「民衆文学」とは距離を置きながらもそれなりの歴史意識を持って現代韓国社会の矛盾と葛藤を描こうとして来た一群の作家たち——李文烈やイム・チョルウ(임철우)——が、文学における歴史意識を拒否する日本の文壇に同調しているわけではない⁽¹³⁾。

ここでは、韓国の民衆意識（宗教意識を含む）の“基底”にまで遡り、その意識に規定された（知識人を含む）人々の社会意識、社会とのかかわり方の根本的なあり方の再定立に苦悶する姿を描こうとした作品や、歴史を素材にして韓国の歴史意識と現代社会の認識のあり方を問おうとしている、総じて言えば文学作品を通

(12)日本の“葬式仏教”が殆どもっぱら「来世」（「前世」）への関心に集中していることからみれば、この「前世」観念は東アジア社会に一般化することは出来ない。それだけではなく、「来世」の“霊”に現世の人々がかかわりを持ち得るとする観念においても、日本と韓国は異質である。光州民衆抗争の犠牲となった若い男女の「靈魂結婚式」を記念して作られたという

運動圏の歌「님을 위한 행진곡(ニムのための行進曲)」も、最近のグアムにおける大韓航空機事故の犠牲者のなかで3組の「靈魂結婚式」が行なわれるという事実も、一般の日本社会の「靈魂意識」からは、理解が殆ど不可能ではないかと思われる。

(13)拙稿「韓国民族文学論の現住所」（社会評論社『月刊フォーラム』1996年2月号）参照。

して“韓国的なもの”の追求の努力を続ける作家・作品のいくつかをとりあげておきたい。もっとも、このように言うともまず“韓国的なもの”とは何かについて私の見解を述べておくことが前提になるべきであるが、行論のうちにその点はそれなりに明らかにして行くことができるであろう。

韓国民衆の意識の“基底”にあるシャーマニズム（巫俗）と民衆芸術としてのパンソリ、その両者を体現したパンソリの唄い手（ソリクン）の女性の現代社会における不思議な存在感を語った作品に、1996年に第20回李箱文学賞大賞を受賞した尹大寧の中編「天地間」⁽¹⁴⁾がある。

李箱文学賞の大賞は、前述の梁貴子「숨은 꽃(かくれた花)」に続いて、第17回は使用文字の変化で読者の視角に訴えるという異色のチェ・スチョル(최수철)「얼음의 도가니(氷のつぼ)」(それが「文学」のジャンルとして許容されるものか否か私には判断できない)、第18回は鼻の低いひとりの若い女性に関する外国生活体験者たちの想出談を並べる崔潤「하나코는 없다(ハナコはいない)」⁽¹⁵⁾、第19回は中央アジアの“高麗人”の追憶と現代韩国人の出会いをテーマとした尹厚明「하얀 배(白い舟)」と、少なくとも現代韩国社会において特にリアリティーを感じさせない作品の受賞が続いていた。それだけに「천지간(天地間)」は“李箱文学賞ひさびさのヒット”という感じを与えた作品であった。

雪の激しく降る日に全羅南道の故郷に向かって

旅行中の主人公（語り手）は、光州のバス・ターミナルで偶然みかけた女性が不思議に気になり、目的地を変更して彼女の後を追う。着いたのはパンソリの唄い手たちが練習の為に訪れることの多い海岸の寒村で、そこの小さな宿屋に泊まって宿の主人から訪れるソリクンにまつわる奇妙な逸話を聞きつつ日を過ごすうち、その女性と言葉を交わし、夜を共にするに至る。

その村では数年前に巫女のソリクンの自殺事件があったが、その女性はその化身のようだという暗示が与えられ、やがて姿を消す。粗筋と言えばそれだけのことであり、特別の物語性があるわけではない。しかし、その女性の実体としての存在感の希薄さに反比例して、その精神世界について、言わば存在感の欠如ゆえの存在感が語られている。これは何だろうか。これこそ、現代韩国人の胸の底にあって、時にはその胸の空虚感を埋め、時には現実逃避の理由を提供し、しかし場合によっては現実批判の武器をもつくり出す《霊》の世界、現代風に再構成されたシャーマニズムの世界を象徴しているのではないであろうか。

一層興味深く読むことが出来ながら、そのテーマの把握を殆ど絶望的にさせた作品に、宋基元の中編「인도로 간 예수(インドに行ったイエス)」⁽¹⁶⁾がある。

宋基元と言えば1970～80年代の民衆文学を代表する作家のひとりであり、とくに都市化の波に流されるソウルから比較的近い農村の人々の葛藤に満ちた生活を、1980年の「光州事態」で

(14)『96李箱文学賞受賞作品集20. 윤대녕 천지간』(文学思想社、1996年)所収。

(15)「ハナコ」は“鼻(コ)ひとつ(ハナ)がない”という言葉から、日本人風の「ハナコ」の別名をつけたという設定であるが、すこし前に大ベストセラーになっていた田麗玉の日本社会論『일본은 없다(日本は

無い)』(知識工作所、1994年)が紹介した日本の女性雑誌『華子』をもじっていると考えられる。

(16)송기원 「인도로 간 예수」(『창작과 비평』1995년 가을호, 송기원소설집 『인도로 간 예수』창작과 비평사, 1995年, 所収)。

服役中に母を失った悲しみと重ねて描いた「다시 月門里에서(ふたたび月門里で)」⁽¹⁷⁾は、民衆文学におけるリアリズムとは何かを示してくれる好作品であった。私が「인도로 간 예수(インドに行ったイエス)」から受けた衝撃は、その同じ作家がこの内容の作品を発表したという事実自体から、まず与えられたと言ってよい。

実際、この作品の語り手(作家自身)は、80年代の「民衆イデオロギー」の持った時代的当為性は認めながらも、独白を通して自分がそれに加わったのは間違っていたと繰り返し強調し、別の新しい生き方の模索としてこの作品を著したことを語っているのである。

勿論、イエス・キリストがインドへ行ったという話ではない。民衆運動の挫折感を抱いて奥深い山寺を訪れた主人公は、その山寺の住持の指示で洞窟での瞑想生活という訓練を続ける。彼の前には異様な形態の怪物が次々と顕れ、それが何を意味するかを住持と語り合う。ここで語られている宗教思想は、本来的な仏教というよりは道教系の神仙思想や北方アジアのシャーマニズムを基調音とするように、私には理解される。

何らかの明示的な「解答」が与えられた訳ではないが、作家は何ごとかに納得して山を下りていく。彼を納得させたのは何なのか。私には遂に理解できなかった。

しかし、表題の「インドに行ったイエス」がある暗示を与えている。世界宗教の根源に共通する人間(および世界)への問いかけが、不安と葛藤に満ちた人々の生活のただなかでこそなされ得るというイメージではないだろうか。く山寺に解決のないことは山寺を体験しなけれ

ばわからない)のかも知れない。

ひるがえって日本の場合、「安保闘争」や「全共闘運動」の指導者や担い手たちのその後の思想的遍歴のなかで、「インドに行ったイエス」を体験した知識人はおそらく極めて少数だったのではないだろうか。韓国においても、かつての民主化運動のリーダーで、今日保守政治家となって“政経癒着”のなかで醜態をさらした人々が少なくないことを、私たちは知っている。しかし「インドへ行ったイエス」が語るのは、冷戦体制崩壊後の(しかも分断克服を課題として抱え続ける)韓国社会における、或るオルタナティブの追求において、“韓国的なもの”が占める空間がなお広がっているということではないだろうか。私はそのようなものとして、この作品を読んだ。

“韓国的なもの”を描こうとすれば、やはり歴史小説が恰好の舞台となろう。歴史小説が必ず“韓国的なもの”を追求しているとは言えないし、中国の古典を現代語化してアレンジした長編小説が近年も次々に刊行されて多くの読者を得ているかと思えば、山岡荘八『徳川家康』の韓国語訳『大望』は既に20年以上も大衆の人気の的となっている。近現代史(旧韓末から解放・朝鮮戦争)を含め、歴史は韓国文学が好んで対象とするし、テレビの「歴史ドラマ」の大衆の人気は日本の「NHK大河ドラマ」を想わせるものがある。その中には考証の充分でないものがあつたりして⁽¹⁸⁾、日本におけるのとはまた別の次元で大衆の歴史認識を歪曲させるのではないかと憂慮されるものがないではないが、とにかく文学や映画などでは歴史物が氾濫

(17) 송기원 『다시 月門里 에서』(창작과 비평사, 1984年)所収。

(18) 一例であるが、女性俳優張美姬の主演するKBSの大

河ドラマ「역사는 흐른다(歴史は流れる)」において、“日韓合邦” 当時から警察署の壁のアジアの地図に満州国が描かれているという具合である。

しており、この国民的「歴史好き」は東アジア社会に共通のものなのかもしれない。

そのなかで、近年発表されたものでやはり“韓国的なもの”の追求という点で見逃せない作品として、朴安植の『소설 소현세자(小説 昭顯世子)』⁽¹⁹⁾を、紹介しておきたい。

昭顯世子とは実在の人物で、丙子胡乱(1636~37年)当時の朝鮮国王・仁祖の後継者に定められていたが、乱後、清の首都(当時)の瀋陽に“人質”として送られ、やがて清朝の人々と交わりを持ちつつ、清による明の滅亡の際は清の軍隊に同行して北京に入城し(そこで当時滞在していたカトリックの司祭からキリスト教や西欧文化について学ぶというエピソードもある)、その後、漢城(ソウル)に帰還するが、尊明思想(小中華主義)を捨てきれない父の仁祖から「清との内通」を疑われて、非業の死を遂げることになった。歴史上の人物として韓国の大衆的知名度においては、さしずめ日本における平重盛か豊臣秀頼ぐらいに相当するのではないかと思われる。

朴安植はこの作品の冒頭と末尾で、偶然の機会に入手した資料によって昭顯世子の生涯の全体像を知ることになったこと、しかも作者自身が他ならぬ昭顯世子の末裔であることを知ったことを記している。この説明はこの作品に「読み物」として関心を持たせることに成功しているようではあるが、その信憑性に不安を感じさせるのも事実で、文学作品としての価値を高めるにはあまり役立っていないように思える。しかし、作品全体を流れる、極限的状况におけるヒューマニズムは、今日の我々をも深い感動へと導く。主人公の昭顯世子以外にも、国王・仁祖や世子妃、清の太祖、多くの武将や戦乱の犠牲となる民衆など、登場人物個々の性格が明

瞭な輪郭を持って伝えられる点、南漢山城や江華島での攻防に迫真感を与える地形や建物についての具体的説明(従って考証の苦勞も十分に推察することができる)などは、明らかにこの作品を「読み物」として成功させるのに貢献していると言えるだろう。

しかし、私にとってのより大きな関心は、「親清派」として肅清される昭顯世子の人間像を肯定的に描いた作家の問題意識は何であったのだろうかという点にある。漢民族の明を宗主国として尊崇し、北方諸民族をオランケ(오랑캐; 野蛮人)として軽蔑する風潮の中で、昭顯世子は清(満州族)の家臣たちと(緊張をはらみつつも)人間的な交流を持ち、朝鮮社会の今後の為に西欧の文物・思想を取り入れようとする進取の人物として描かれ、朝鮮王朝内の尊明派の家臣たちの退嬰的な思考や行動と対比されていることは、何を意味するのだろうか。

歴史小説としての面白さからすれば、王族の非業の死に至る過程を描いた点で共通する李光洙の有名な『端宗哀史』に並べることが出来よう。しかし『端宗哀史』の端宗が、あくまで権力欲の犠牲となる「哀史」の主人公であるのに対して、『昭顯世子』には、歴史認識におけるある主張が含まれているように思われる。端的に言ってそれは『外勢』とのかかわりにおいて、あらわれている。

旧韓末開化期の朝鮮王朝の官僚群の退嬰的性格に由来した亡国への道、植民地時代の「親日派」群像、解放後の親米反共路線を定着させたもと親日派……。韓国の近現代史も、“アジアとの連帯における抗日闘争”の輝かしい歴史と同時に、「親日・親米・親漢」と他のアジア諸民族蔑視を裏腹にした韓国版“脱亜論”の系譜を持っている。作家・朴安植は『昭顯世子』を

(19) 박안식 『소설 소현세자 상·하』(창작과 비평사、

1996年)。

発表することで、アジア諸民族に開放された歴史認識の再定立を訴えているように、私には考えられた。

歴史ではなく、現代韓国社会自体を対象にした異色の作品集として、申京淑『오래 전 집을 떠날 때(ずっと前に家を出たとき)』⁽²⁰⁾を挙げておきたい。同書には全部で8篇の中短篇小説が収録されているが、全体を流れる共通テーマは「빈집(人の居ない家)」⁽²¹⁾である。

なかには「벌판 위의 빈집(野原の空き家)」のようなメルヘンを想わせる短篇もあるが、その場合も最後は主人公の子供たちの死という結末に至るなど、全体として申京淑の「빈집」は何かしら怖さを覚えさせる不気味な存在である。済州島の城山浦のホテルに投宿した主人公(作家自身と思われる)が、窓を通してある少女と出会い、遂に直接言葉を交わすうちに知るその少女の家族の持つ病……そして死。作家はふたたびひとり暮らしの場であるソウルの自宅に戻る。そこが主人公にとっての「빈집」であることは言う迄もない(「깊은 숨을 쉴 때마다[深い息をするたびに]」)。

都市化の急速な進行によって、蘆原区上溪洞や冠岳区奉天洞などソウル市内のもと零細民居住地域に林立する中高層アパート群、盆唐・一山などの郊外型新都市には、分譲されたものの売れ残っている「빈집」がかなりの数に達するし、撤去を目前にした貧民街ではガランとした空間に猫だけが坐っている光景がある。離農した農民の住居も「빈집」となって、荒れるにまかされている。現代韓国社会はまさに「빈집」

の世界のようである。

しかし、申京淑が描くのは「빈집」の与える恐怖心だけではない。留守にした家に《戻る》ことによる「빈집」との和解こそが、作家が主張するテーマのように見えるからである。人間の造り出した疎外(「빈집」)は人間が再びそこに住むことによって、和解の契機を得る。その点で作者の姿勢は究極的には楽観的であるように感じられた。無条件で《近代》を賛美する楽観ではなく、《近代》のもたらした人間疎外から人間自身を取り戻し得るといふ楽観と言えよいだらうか。何れにせよ、申京淑は現代韓国社会の現実が生み出した作家であることは、間違いない。

南北分断の現実を、自らの北朝鮮滞在時の体験を下敷にして描いた呉石根のルポ風の小説『異邦人』⁽²²⁾も、近年の話題作のひとつであることからわかるように、分断の残酷さと統一への想いを主題にした文学作品も、続けて発表されている。嵐のような「民衆文学」が退いた後に、韓国民衆の最も基本的な問題を問いつける文学活動が、静かに、しかし根気強く継続されているのである。“韓国的なもの”の諸相が、それぞれ自らの道を歩きながら、どのようにお互いの問題を切り結んでいくことになるのか、注意深く観察を続けたい。

IV. 「韓国現代史」と「韓国現代文学」

社会構成体における時代区分と文学における時期区分は、同じではない。植民地時代の朝鮮社会を社会構成体として(仮に)「植民地・半

(20) 신경숙 『오래 전 집을 떠날 때』(창작과 비평사, 1996年)。

(21) 韓国語の「빈집」にあたる日本語としては「空き家」が自然であろうが、申京淑のテーマとする「빈

집」は、文字通りの「空き家」の場合以外に、(旅行などで)一定期間留守にした家を指していることが多い。

(22) 오석근 『이방인』(사회평론, 1997年)。

封建社会」と規定したとしても、植民地時代の文学を「近代文学」ないし「現代文学」とすることと矛盾するわけではない。そのことを確認したうえで、後論とのかかわりで、「韓国現代史」の時代区分をどう考えるかについて私の見解の結論だけを述べておきたい。

言うまでもなく、歴史研究における時代区分の問題はその社会の全体像の把握にかかわる、歴史認識の総括的位置を占めると同時に、新しい歴史認識を構築しようとする時の出発点となる方法的視点をも提供する意味を持つ。このことは、現存社会主義の「崩壊」によって「社会構成体の継起的移行」論が根本的な再検討の対象となっている今日においても、確認されるべきであろう。例えば「近代」「現代」という時代の「基準」の設定を考え直すということと、「近代」「現代」という時代区分そのものを否定するということは、次元の異なる問題だからである。

ところで、韓国における「現代史」のスタート時点をどこに求めるかという点について、私は“1960年の4月革命、1961年の軍事クーデター以後”と考えたことがある⁽²³⁾。それは社会経済や政治に関する厳密な分析を経た結論と言うよりは、今日の韓国社会の構造的枠組が形

(23) 滝沢秀樹・鄭敬謨・隅谷三喜男『韓国現代史をどう見るか』（「朝鮮問題」懇話会、1994年）における私の発言参照。

(24) 敢えて言えば、南の大韓民国の社会が北の朝鮮民主主義人民共和国のあり方との関数関係を以て規定される側面が後景に退いて、“全朝鮮”から分断された南の社会が独自の運動法則を持つことになった画期という意味を含んでいる。この場合、「現代史の展開」というのは、「より発展した段階への到達」という価値判断の基準となるものではないことは、言う迄もない。

(25) 崔仁勳の「広場(광장)」は1960年10月に『새벽』に発表され、約30%書き足したものが単行本となった後、それを修正したものが新丘文化社の『現代韓国文学全集』に収録された。その再修正版が民音社から刊

成された時期⁽²⁴⁾という意味での、ひとつの“作業仮説”であった。

仮にそのように考えた場合、「韓国現代史」のスタートとほぼ時を同じくして登場し、今日までもロングセラーとしての位置を占め続けている崔仁勳の『広場』の持っていた時代的意味ということ、あらためて問うてみることも意義があるだろう⁽²⁵⁾。

『広場』が衝撃的であったのは、なによりもまず、解放・分断・朝鮮戦争の過程を正面から論じた作品であったという理由によるだろう。主人公は解放後のソウルで生活し、決意を持って“越北”するが、北の社会は想像していたとは異なる官僚主義のはびこる社会だった。芸術団に属する美貌の恋人は、朝鮮戦争の勃発と同時に、“自分の身の安全”を主人公への愛に優先させてモスクワ公演へと去る。主人公は人民軍の一員として洛東江の攻防戦に参加し、生死の境地で前線慰問に訪れた恋人と奇蹟的に再会し、軍の規律を破って密会を重ねる。やがて捕虜となって巨済島の収容所に入るが、収容された人民軍兵士たちのなかでの複雑なイデオロギー的葛藤と人間関係のなかで苦しんだ末、捕虜たちに示された3条件、北への帰還・南での解放・第三国への出国、のうち、第3の道を選

行された後、あらためて手を加えて文学と知性社から1976年8月に刊行される。文学と知性社版はその後版を重ね、1996年10月には遂に3版103刷に至っている。1960年代以後の小説文学としては最大級のロングセラーであると言ってよいであろう。私の手元にあるのは『崔仁勳全集1. 광장(広場) / 구운몽(九雲夢)』(문학과 지성사, 1996年)であるが、同書巻末のキム・ヒョン(김현)による解説は、修正の過程で内容がどう変化して来たかを説明している。『広場』について語るとき、どの版にもとづいて論じるかによって理解が異なってくることに注意しておきたい。なお『広場』の研究としては、裴美善「崔仁勳의『広場』研究——失郷意識과 自己同一性을 中心으로——」(延世大学校碩士論文、1994年6月)がすぐれている。

択してマカオに向って乗船する。そして航海中に身を投げて自ら死を選んだことが暗示される。

小説は、時間を追ってストーリーが展開するのでなく、最後の航海の場面が冒頭に描かれ、様々な追憶談が繰り返されるので、その筋を正確に理解するのは容易ではないが、敢えて乱暴に整理すれば上述のような内容である。主人公にとって、南も北もいまや自由に呼吸のできる“広場”ではない。第三国こそが“広場”になるかも知れないが、結局それも虚しい幻想のように思われる。彼にとって最後は“死”だけが“広場”を得ることであった。作家はこのように主張していたように思われる。

朝鮮戦争後、戦争の過程での悲劇や北の社会の実相を描くことが、文学作品のテーマになって来なかったわけではない。しかし、李承晩政権の硬直した反共体制のもとでは、共産主義の悪魔性を前提とし、それを暴露・告発するという内容以外のもの、たとえば共産主義との真摯な思想的格闘や人間関係における愛と葛藤などを主題にした作品は、ほとんど発表が不可能であったと思われる。5月軍事クーデター以後、1970年代の維新体制に至る朴正熙政権のもとでは、朴正熙氏自身の個人史における“秘話”のタブー化という要素も加わって、“反共”の中身自体が一層矮小化され、歪曲されたものとなっていった。『広場』はまさに、4月革命の空間でこそ発表された作品だったのである。

1980年代に至って、我々は李炳注の『智異

山』『南労党』や李文烈の『英雄時代』に接することになる。「民族文学」を指向する人々から、それらのもつイデオロギーの性格は厳しく批判されるけれども、分断・朝鮮戦争の全体を正面から描いた文学作品として大衆的人気を得たのは、分断を正面から扱う文学の20年以上の空白があったからこそであろう。南部パルチザンとしての体験記として話題を呼んだ李泰『南部軍』の出現以後、その時代を描いたものとしては、硬直したイデオロギー性から解放された文学作品群が、我々の前に姿を見せることになった⁽²⁶⁾。

もし『広場』が存在しなかったならば、「4. 3事態」「麗水・順天」「6. 25」は、1980年代半ばまで少なくとも文学世界では“隠された歴史”になってしまっていたかもしれない。「韓国現代史」をスタートさせた4月革命の空間の生んだ『広場』こそ、分断固定と新しい次元での分断克服の過程としての現代韓国社会の出発を飾るのにふさわしい作品であったと言えるのではないだろうか。

しかし、「韓国現代文学」を語ろうとすれば、別の視点が要求されることになる。昨年(1996年)に創作と批評社から刊行された『韓国現代代表小説選』全9巻⁽²⁷⁾を通読して、私が最も深刻に考えたことは、歴史の現代性と文学の現代性の相関関係ないし乖離という問題についてであった。

『韓国現代代表小説選』には編者のひとり林

(26)『南労党』『英雄時代』『南部軍』については、前掲拙稿「生の具体性と真実性」で触れた。なお80年代末には、逆のイデオロギー的性格を持つ作品、例えば済州島の「4. 3事態」をテーマにしたキム・イルウ(김일우)『섬사람들(島の人々)』(힘, 1988年)のような作品が発表されるが、固定した分断意識を克服するのに有効な視点を提供したとは、とても考えられない。

「4. 3」をテーマにしたものとしては玄基栄『마지막 테우리(最後の牛飼い)』(창작과 비평사, 1994年)に収録された短篇のいくつか、近年の傑作であろう。

(27)『한국현대대표소설선』1~9巻(창작과 비평사, 1996年)。この『小説選』の内容自体については、別稿で詳しく検討する予定である。

榮澤氏により「刊行辞」(各巻共通)がつけられ、次のようなことが述べられている。

「……文学界においてはそもそも‘西洋化’に該当する様な概念すらなかったのである。内在的な古典小説の基盤に外来的な要素として西欧の小説を受け入れながら誕生したのが、われわれの近代小説である。この近代小説は、民族文学としての資質を拡充しながら、豊かにかつ澁刺と成長した。……『韓国現代代表小説選』は、すなわち20世紀の韓国小説の豊富ですぐれた収穫物を総整理しようとする企画である。長編小説はやむを得ず除外して、短篇小説中心となった。……われわれの場合、小説文学の真髄は短篇小説にあったのである。……大体においてわれわれの短篇小説は1920年代に成立、1930年代に完成するが、それ以後も今日までその枠組のうえでそれぞれ多彩で華やかに花を咲かせたと考えている。……当時の短篇小説は意外に速く高い水準に到達することができたのであったが、それはその直前に、形式的にそこに近いところまで至っていたからである。小説選はこの点を考慮して、1910年代を出発線とした。」⁽²⁸⁾

この「刊行辞」はそれ自体としては極めて興味深い論点をいくつか示していると言えるが、文学における「近代性」「現代性」をどう規定ないし理論化するかというところには、踏み込んでいない。

1997年8月9日に開催されたシンポジウム「近現代のコリア」⁽²⁹⁾の場での私の発言に対して、出席者のひとりでのこの『小説選』の編者で

もある崔元植氏(韓国・仁荷大学校教授、『創作と批評』編集委員)は、「今日の我々が何の辞書も必要としないで自然に読める現代韓国語によって書かれた文学」であることを、「現代文学」の規定要因として挙げた。私にとってまさに蒙を啓かれた想いであった。

実際、帝国主義の植民地支配を経験した民族において、その植民地時代のほぼ全期間を通して民族固有語での文学活動が継続した例は、朝鮮以外にはそれほど多くを見ないのではなからうか。ここには朝鮮における民族形成史が既に一定の段階に到達していたこと、前近代の東アジアの国際関係のなかに位置づけられた前近代の国家が近代的国民国家の枠組を決めたこと、などの要因が関連していると考えられる。この点は朝鮮文学史の固有の性格を理解するうえで、看過されてはならないと思われる。

しかし、それで完全な説明になっているとも考えられない。植民地時代の文学作品の多くは、既に初期の作品から日本語風の文体を使おうとしていた李光洙の作品などを別にすれば、少なくとも1930年代以前のもの私の韓国語読解能力ではそのままでは理解困難なものが多いのが、正直なところである。『小説選』は今日の韓国で一般に使われているハングルの綴字法(맞춤법)に改めてあるので、その点は読者にとって親切であるが、それでも現在の韓国の小説・新聞・雑誌等の韓国語とは、かなり異質の響きを感じるのが事実である⁽³⁰⁾。『韓国現代代表小説選』の立場をいったんは承認したうえ

(28) 林榮澤「刊行辞」(『한국현대대표소설선』各巻共通)、4～5頁。日本語は拙訳。

(29) 1997年8月8～10日の3日間、大阪で開催された「第5回朝鮮学国際学術討論会」(北京大学朝鮮文化研究所・大阪経済法科大学アジア研究所・国際高麗学会の共催)の2日目に行なわれた5つのシンポジウムのうちのひとつ。

(30) 当然、私自身の韓国語の実力とも関連するが、それだけではない。例えば有名な「三・一独立宣言文」を、現代韓国語と見ることができであろうか。それが1930年代以降の「プロレタリア文学」時代になると、にわかに読み易くなるのである。「現代韓国語」の成立という点について、識者の御教示を得たいと思う。

で、文学の「現代性」ということについては更に厳密な規定性が加えられるべきだと考える。

問題としたいのは「現代韓国語」にのみかかわるのではない。1960年代以後の「韓国現代史」と、1920年代以来の「韓国現代文学」の連続性と乖離について考察してこそ、「韓国現代文学の現住所」を明らかにすることが出来ると思われるということである。

日本帝国主義下の朝鮮プロレタリア文学が、解放直後の左翼文学に連続したことは疑いない。しかし、分断体制が固着化するなかで、それぞれ全く異なった事情によってではあるが、南でも北でもプロレタリア文学の伝統はほぼ完全に消滅することになった。1980年代の後半の韓国において「民衆文学」が、時には「労働解放文学」が主張されたとき、かつてのプロレタリア文学・左翼文学からの断絶・乖離という点が十分に考慮されていたようには見えない。彼らの文学が僅か数年後には大衆的支持基盤を失っていくのには、(韓国社会の構造的変化ということが勿論第一義的要因ではあろうが)自らの文学的伝統への省察の弱さということが関係していなかったであろうか。

あるいはまた、1960年代以後「参与文学」に対して「純粋文学」が主張されたとき、「純粋文学」の側は植民地時代の「親日文学」の残滓

の清算という問題をどの程度自覚していたであろうか。

本稿では“韓国的なもの”の追求という点で、シャーマニズムの問題にも言及した。80年代の流行作家・趙星基のように、韓国キリスト教とシャーマニズムの関連を追い続けている作家もいる。さきに紹介した尹大寧「天地間」のような作品を含め、ここでは金東里「巫女図」(1936年。『小説選』5巻)や鄭飛石「城隍堂」(1937年。『小説選』5巻)などからの継承性(ないし断絶)が、どのように意識されているのであろうか。

若者の「書物ばなれ」は、韓国でも進んでいるようである。それでも日本の『失楽園』ブームと韓国の『아버지(父)』ブームを対比すれば、なお韓国の読者層が文学に求めているものの社会性を窺うことが出来るであろう。そして娯楽大衆小説の大洪水のなかで、誤った歴史認識の是正、よりよい未来を展望しようという意識を持った、さらには何よりも現代社会における人間存在の根本に迫った、小説文学もひき続き健在である。本稿はその流れのなかに、現代の韓国文学のあり方を位置づけて理解しようと試みた、ささやかな問題提起にすぎない。

(1997年9月7日 稿了)

